

ヨーロッパ経済史研究における『地域』：回顧と展望

鳩澤 歩

- 1, 「地域」の西洋経済史研究の30年
- 2, 「地域」アプローチ再考 ―地域経済史研究の舞台
- 3, 産業集積・その周辺
- 4, EU統合史における「地域」
- 5, 空間経済学的アプローチの可能性

1, 「地域」の西洋経済史研究の30年

S. ポラード (Pollard (1973) (1981)) 以降、「地域」の視点導入は定着

- ・ 一国史的研究, あるいは国民国家を分析単位とする研究の優勢は第2次世界大戦後, 1950-70年代初頭にひとつのピークに
 - ・ ヨーロッパにおける「地域」への着目にも70年代以降の政治的・社会的動向が反映されている → 最近の研究でも90年代以降の展開をふまえてこれが確認される
- + 歴史学の「spatial turn」 << 89年/91年の事件

「(……) いかなる国の, いかなる時期の経済発展においても, 地域性を無視して具体的な分析は一步も進まないことはもはや自明のことに思える」(安元2009, 3-4頁)

人口動態, 疾病・健康・公衆衛生, 人的資本や有用な知識の役割, 技術開発といった最近隆盛の研究領域ないし対象においても, 一国レベルの大掴みな集計のデータに飽き足らず地域的なデータの収集・観察にすすんだ諸研究は, マクロ・データによった通説や理論による一般的想定とは異なる新たな知見をもたらしている。・・・豊富な実例

2, 「地域」アプローチ再考 ―地域経済史研究の舞台

地域レベルでの議論にそれ自体の積極的意義を当然視できた時期も, もはや過ぎた。単純な一国史研究へのアンチテーゼとしての大きな役割はこの20年ほどでほぼ完了。

個々の研究はある地域を対象とする必要をそれぞれ明らかにする義務を持つように(あらためて)なっている。= 「地域」という視点を前面に出すことの積極的な意義を主張する必要。 <<< 「歴史的な正確性が増すという以外に, 何らかの新しい, 潜在的に実り多い疑問を拓くこ

とにメリットがあらねばならない」(Pollard 1973, pp. 638-639)

「経済現象を空間的に捉える場合, 地域, 国家, 国家連合, 世界といった様々なレベルの経済単位との関連のなかで重層的に捉えることが求められている。『地域』概念に関する議論は, それを柔軟に可変的な概念として捉える方向で収斂しつつあると言ってよい」(馬場

2010, 53 頁)

→ 個々の研究においては最も適切な分析単位が（一つだけではなく「重層的」な併用があるにせよ）選択されるべきであろう。「地域」を視点として導入するに相応しい対象や視角—舞台とでもいうべきもの—を探っていかなければならない。<かつてのプロト工業化論

3, 産業集積・その周辺

産業集積（＝「1つの比較的狭い地域に相互に関連の深い多数の企業が集積している状態」（伊丹・松島・橋川 1998, 2 頁）論：ヨーロッパ・イタリア北部を対象とするピオリ／セーブルの研究（Piore and Sable 1983）がその嚆矢

- ・安元（2009）が最近の端的な成果

- ・「原経済圏」論者には、産業集積への関心が自然に伴われている

>> 黒澤（2002）（2010） 国境の経済史から産業集積論への展開

- ・都市経済史

産業集積の“継続”から“形成”に関心がシフトしたとき、地域における資源賦与の問題が前面に＝ 環境経済史との接点

4, EU 統合史における「地域」

- ・ EU = 「地域のヨーロッパ」

90年代以降、古くからの経済地域への関心が復活；たとえば「ドナウ経済圏」

- ・しかし、歴史研究の対象としての EU 統合については、国民国家の意思や利益を EU 統合の展開における決定的な要素と位置づける見方が定着； A. ミルウォード「国民国家のヨーロッパ的救済」テーゼ

- ・中屋（2011）「ミルウォーディアン」への批判的検討

- ・・・・地域の視点も果たす役割大きい 小国以下の規模の「地域」や国境にまたがる「地域」がヨーロッパ統合に果たした役割の評価 / 個々の地域経済の活動やその連関への実証観察

5, 空間経済学的アプローチの可能性

- ・幅広い空間経済学の適用範囲・射程 = 「地域」とは何か？ を逆照射

- ・近現代ドイツ・中欧を対象とするヴォルフ（N. Wolf）らによる諸成果＝「交易費（輸送費）」という概念の導入を軸とする空間経済学的なアプローチの適用

再生ポーランド：境界効果の存続

「ドイツはひとつの国民経済として統合されていたのか」：「経済統合」＝「あるエリア内部の境界を超える交易費がエリア間の境界（外国国境）を超える交易費よりも有意に低い状態」と定義

ハプスブルク帝国における「経済的ナショナリズム」

引用・参考文献

- Piore, M. and Sabel Ch. (1983), *The Second Industrial Divide: Possibilities for Prosperity*, New York: Basic Books Inc.. (邦訳 マイケル・J・ピオリ／チャールズ・F・セーブル (山之内靖・永易浩一・石田あつみ訳) (1993), 『第二の産業分水嶺』, 筑摩書房)。
- Pollard, S. (1973), “Industrialization and the European Economy”, *The Economic History Review*, vol.26, pp.636-648.
- (1981), *Peaceful Conquest: The Industrialization of Europe 1760-1970*, Oxford:Oxford University Press.
- Schlögel, K. (2003), *Im Raume lesen wir die Zeit: Über Zivilisationsgeschichte und Geopolitik*, München: Carl Hanser Verlag
- Schulze, M.-S. and Wolf, N. (2009), “On the Origins of Border Effects: Insights from the Habsburg Empire”, *Journal of Economic Geography* Vol.9, pp. 117-136.
- Schulze, M.-S. and Wolf, N. (Mimeo), "Economic Nationalism and Economic Integration: the Austro-Hungarian Empire in the late 19th Century", *Economic History Review* (forthcoming).
- Trenkler C. and Wolf, N. (2005), “Economic Integration Across Borders: the Polish Interwar Economy”, *European Review of Economic History*, Vol. 9, pp. 199-231.
- Warde, Paul, (2006) *Ecology, Economy and State Formation in Early Modern Germany*, Cambridge et.al.: Cambridge University Press.
- Wolf, N. (2005), “Path Dependent Border Effects: the Case of Poland’s Reunification (1918-1939)”, *Explorations in Economic History*, Vol.42, pp. 414-438.
- (2009), “Was Germany ever united? Evidence from Intra- and International Trade, 1885-1933”, *Journal of Economic History*, Vol. 69, pp. 846-881.
- 馬場 哲 (2010)「日本における西洋経済史研究」, 石井寛治, 原 朗, 武田晴人編『日本経済史研究入門 (日本経済史 6)』, 45-68 頁 所収。
- 伊丹敬之・松島 茂・橘川武郎編著 (1998)『産業集積の本質』, 有斐閣。
- 黒澤隆文 (2002), 『近代スイス経済の形成——地域主権と高ライン地域の産業革命』, 京都大学学術出版会。
- 黒澤隆文編訳 (2010), 『中立国スイスとナチズム——第二次世界大戦と歴史認識——』 京都大学学術出版会。
- 中屋宏隆 (2011), 「『ヨーロッパ統合史』研究の確立」, 「愛知県立大学外国語学部紀要 (地域研究・国際学編)」第 43 号, 215-230 頁。
- 安元 稔 (2009), 『製鉄工業都市の誕生 — ヴィクトリア朝における都市社会の勃興と地域工業化』, 名古屋大学出版会。